コミュニケーション

ヤコブソンの6機能説

『9ヶ月革命』

Tomasello　1999年

一般的には、生後約9か月以後のヒトの発達過程における特徴を指す。9か月より前では、自己と他者または自己とものという2者間の関係で乳児の認識世界が成り立っているとするのに対して、9か月以後では、自己と他者とものという3者を含んだ認識世界に至るとする。

[M Tomasello; The cultural origins of human cognition. Cambridge, MA: Harvard University Press:1999]

三項関係について

三項関係は社会性・コミュニケーションの発達において重要な指標の一つ。
アスペルガー・タイプが職場などの組織で生活するために最も重要な点です。
アスペルガー・タイプは職人、医師、研究者など、二項関係が主だった職場では問題を生じないのですが、看護婦さんのような、常時、複数の関係の対応が要求される職場では対応が苦しくなります。極力、二者関係に還元する技術が必要です。

母親に抱かれている赤ちゃんは、パンと自分という二項関係に没入している。
父親に抱かれている娘は、パンをもらった喜びを、写真を撮っている人に投げかけている。表情からも三項関係が成立していることがわかる。

＜写真は“http://gahag.net/tag/家族/“より頂きました。＞

指さし：豊かな心の獲得には、母親との基本的信頼（basic trust）が重要なものかがわかります。

生後8，9か月頃にでる三項関係はかなり高度なものである。
この絵を私なりに勝手に解釈すると、知らない叔父さんが、顔を近づけてきた。
この叔父さんは、良い人なのか悪い人なのかを、母親の表情や抱いている母親の微妙な筋肉などの変化から情報を受けて、叔父さんに対する気持ちを表情に表す。
微妙で豊かな感情表出は母子関係が深いことがわかる。
豊かで、複雑な多項関係の対応能力の発達は、母子関係にあることがわかる。

三項関係に関連した問題点

・相手と話しているときに、横から他人が割り込んできたり、
　大きな音がすると、何を話していたかも忘れる。

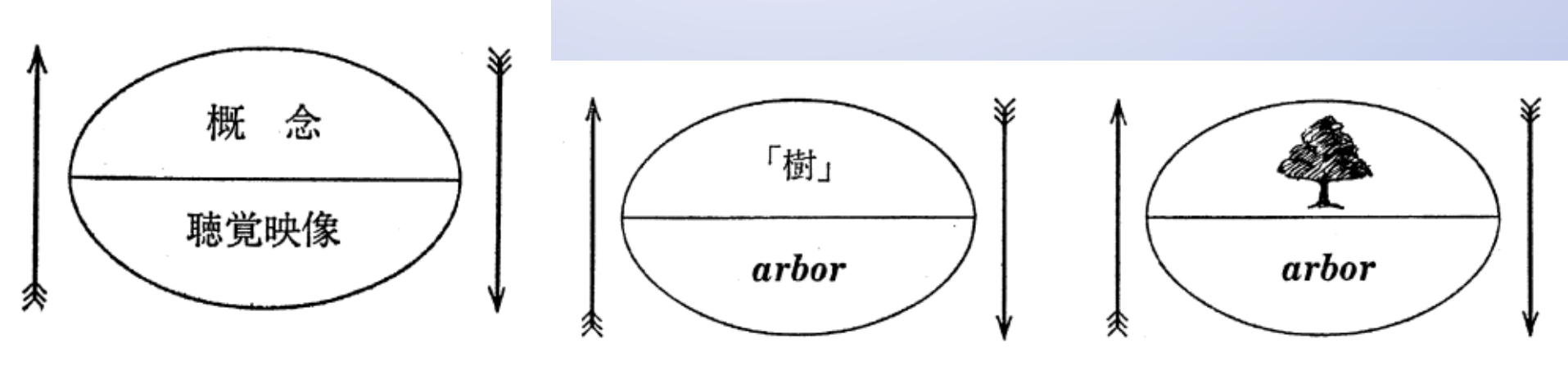
・雑談が苦手

対策：極力、二者関係に集中する
　　⇨職人、技術者という二者関係の世界を主とした職場を選ぶ

これ以降は、講演会で説明します

能記と所記

ソシュールは『一般言語学入門』で象徴について“言語記号を,いっそう精密にいえば,われわれが能記とよぶものを示すために,象徴(symbole)という語をひとは用いてきた.それを許すには都合の悪いことがある,まさにわれわれの第一原理のゆえである。象徴の特質は,恣意性に徹しきらないところにある;それはうつろではなくて,能記と所記とのあいだにわずかながらも自然的連結がある。法の象徴である天秤は,これを随意の他のもの,たとえば馬車などに代えることはできないであろう“。



ルーディック象徴

Jean Piaget

クライン（タスティンなど子ども分析の専門家たちも含め）の考察は『無意識的』ルーディック象徴の研究に基づいている。
クライン曰く：‘ phantasies’は、母親の身体の中にある、と。
（『児童の象徴形成』Jean Piaget,1945）（ピアジェは1922年精神分析の国際協議会がベルリンで開催された時、『象徴的思考と子どもの思考について』という論文を発表したが、フロイトがすでに興味をもっていたと語っている）

【ルーディック象徴には三つのグループが数えられる】

1.子ども自身のからだと関連した興味に関するルーディック象徴である（吸うこと排泄すること）。

2.基本的家族感情に関するルーディック象徴（愛情、ジェラシー、攻撃性）。

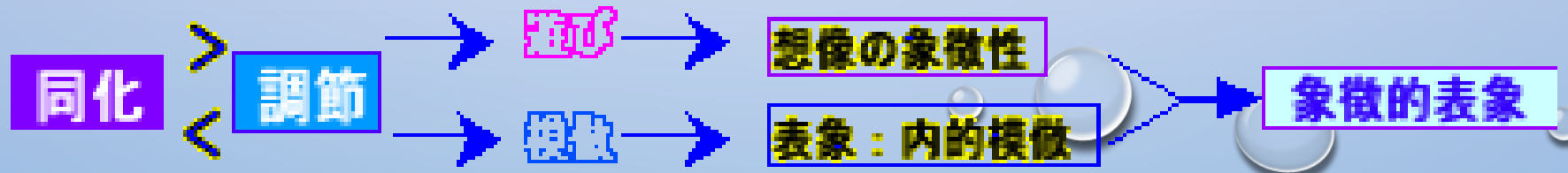
3.赤ん坊出生にまつわる不安に関するルーディック象徴である。これらの痕跡が精神分析療法を受けるおとなの空想や夢に沢山見出される。（夢の解釈にとても役に立つ）

＜例＞

*ズーバブ（想像的なもの）は彼女の臍をつかって水を出した

*お産のためにベッドにいる遊びをした。それからある人形が自分の赤ん坊だといった。–なぜならばそれは私の内部から来たからだ。

［ピアジェの象徴的表象形成機構（下に大雑把まとめた）］



ここで、コミュニケーションについて、言語学的な考察として著名な
ヤコブソンの6機能説を参照してみたい

ヤーコブソンは1960年の講演「詩学と文体論」で、
ことばには6つの機能があると述べた。

話し言葉によるコミュニケーションのどんな行為においても、‘構成因子’と認められるものを6個挙げている。
これら6個の要因が、言語の色々な機能を決定する’ことを提示した。

コミュニケーションに不可欠な六つの因子
（ヤーコブソンの6機能説）

六要因（指向するもの）：発信者、受信者、メッセージ、コンテクスト、コード、接触
六種言語機能　：情動機能、指令機能、詩的（創造）機能、指示機能、交話機能、メタ言語機能

CONTEXT（コンテクスト）
（referential）（指示機能）

MESSAGE（メッセージ）
（poetic）（詩的創造機能）

ADDRESSER（発信者）　ADDRESSEE（受信者）
（emotive）（情動機能）・・・・・・・・・・・・・・・・（conative）（働きかけ、指令機能）

CONTACT（接触）
（phatic）（交話的機能）

CODE（コード.言語）
（metalingual）（メタ言語機能）

1. 情動的（emotive)、表出的（expressive）機能

この機能は、話し手が話の内容に対してとっている態度をじかに表現することを目的としている。
ことばを発して、他者に伝えようとする送り手に関わる機能である。
[アスペルガー・タイプはコミュニケーションをとる動機づけが弱い]
言語の純粋に主情的な層をなしているのは、間投詞である。
「えっ!?」「うわ!!」といった驚きや「Fuck!」など怒りを表す言葉がこの機能を持つ。つまりは話し手の気持ちが率直に出たものである。
話し手は語を選択する過程で自分の好みの語をいつでも自由に選べるわけではない。
聞き手に話が通じるように「自分と話し相手が共有している語彙の貯蔵庫」から語を選ばなくてはならない。
「わかる？」などと相手のコードを探りつつ（：メタ言語機能）、語を選択する。語の選択に際して、話し手は自分の意志に基づくのではなく、「相手を喜ばせようとするために、またはただわかってもらうために、あるいはまた相手に認めてもらうために聞き手の用語をう」のである（『言語の二つの面』）。
そのため、話し手は意味したいことを言語記号に言い換えるとき、自身の言いたいことを完全に記号に移しかえることはできず、その近接において表現しているのである。意味したい対象からその近接物へと視点をずらすことによって表現を可能とし、このとき必ず意味の転位を生みだしている。

一方、聞き手も話し手のコードをただ翻訳すれば良いだけではない。聞き手には話し手以上の能力が要求される。たとえば、話し手が//sΛn/と発するとき、sun「太陽」とson「息子」のどちらを意味しているのかを、話し手は前もって知っているのに対して、聞き手はコンテクストに依拠して意味を推測するしかない。

話し手は語りたい意味内容をはじめから有していて、それを音にしていく「意味から音へ」（descendant operation）の過程をたどるが、聞き手は話し手の発したことを再構成し、「語における音、文における語、発話全体における文を次々により大きな全体にしてまとめる過程」をたどらなければならない。こうした「音から意味へ」（ascendant operation）の過程で、聞き手は語られている意味を推量することしかできない。

発話を生産する際には、直接構成要素への焦点合わせが先行するのに対し、発話を知覚する際には、メッセージはまず第一に推測の過程にある。……発信者には何のあいまい性もないのに、受信者にはメッセージは多くのあいまい性を含んでいる。

聞き手は受け取ったメッセージを「完全な等価性」に基づいて個々の記号単位に翻訳するのではなく、「メッセージ全体」に置き換えることで理解している。

聞き手はメッセージの受動的な理解者でなく、能動的な意味解釈者であり、意味を決定するのは話し手ではなく聞き手である。「語る主体」の意識から出発したソシュールに対して、ヤコブソンはコミュニケーションにおける聞き手の役割を重視する、いわば「聞く主体」に注目していた。

2. 働きかけ（conative)機能

話し手が話し相手に何かしてもらいたいときに使う言葉がこの機能を持っている。

「行け！」「急げ！」や「～してくれませんか？」など、命令・要請・依頼・勧誘・禁止表現がこれに当てはまる。

「この車の中、暑いね（クーラーつけない？という意味が隠れてる）」など日本語のように婉曲的にこの機能を持つ表現も存在する。

3. 指示的（referential)機能

発話された状況であるコンテクストに基づく「指示的機能」は、コミュニケーションにおいてもっとも支配的な機能（「ドミナント」）である。

メッセージの言語構造は、まず第一に、支配的な機能に依存している。

ヤコブソンが指示対象とコンテクストを結びつけたのは、指示対象は必ず語られている状況、つまりコンテクストのなかでのみ明らかになり、コンテクストなくして指示的機能が果たされることはないためである。

指示対象への志向（Einstllung）、コンテクストへの定位―手短にいえば、いわゆる指示的〔referential〕機能一が数多くのメッセージの主たる役目である。（フッサールの意識志向性）

出来事や事象をただただ伝える表現がこの機能を持っている。

「●●容疑者、逮捕」「×××祭りが〇月△日に開催されます！」等

4. 交話的（phatic)機能

人は誰かにあうという接触状況において、会話を行なう。
挨拶や噂話などがこの機能を持つ。
つまり人と人とが接触したときに発生される言葉を指し、言葉が接触においての何らかのクッションとなる役割を持つことを意味する。

コミュニケーションを開始したり継続したり打ち切ったり、あるいは回路が作動しているかどうかを調べたり（「もしもし、聞こえますか」）、 話し相手の関心を引いたり、話し相手が注意深く聞いていることを確認したりすること（「聞いていますか」）とか、あるいは 電話の向こうでの「もし、もし」）を主たる役目としているメッセー ジが存在する。

接触へのこうした定位〔set〕、あるいは交話的〔phatic〕機能は、儀礼的な決まり文句のおびただしい交換や、コミュニケーションの引き延ばしだけを目的としている対話などにあらわれる。

ここで下記に山極京都大学総長の講演のメモを紹介します

2017.10.28京都大学にて

コミュニケーションの原点：言葉の発達の前に音楽的なコミュニケーション
直立二足歩行が歌う能力を上げた。人は立って踊る。共同の歌と踊り
言葉の原点は音楽（ヤーコブソンも類似のことを書いてあります：私の追記）
心の理論（共感能力）　顔と顔との対面：言葉以外の情報を伝達

ITによる超スマート社会
　長所：効率的
　欠点：顔が見えない
　　リーダーの不在
　　信頼関係の欠如
　　安全・安心でなくなる
　　世界に中心がない
　　平均化した社会
　　不安の時代へ
次世代のコミュニティの要件：身体や五感を使っての交流が大切

＜聞き間違いがあるかも知れません＞

ドロシー・パーカーの作品〔『とうとう二人になれたね』〕には格好の例が見られる。

「さて」と若者は言った。「さて」と彼女も言った。
「さて、やったね」とかれは言った。
「ええ、やったわ。そうよね?」と彼女は言った。
「ああ、やった。やっとやったね」とかれは言った。
「そうね」と彼女は言った。
「そうさ」とかれは言った。

コミュニケーションを開始し維持しようとする努力は、ひとをまねてしゃべる鳥に特徴的なものである。

したがって、言語の交話的機能は、鳥が人間と共有する唯一の機能なの　である。これは、幼児が獲得する最初の機能でもある。幼児は、情報を伝えるための通信を送ったり受け取ることができるようになるまえに、コミュニケーションをはかろうとする傾向にある。

5. メタ言語的（metalingual)機能：注解的機能

ある言葉を別のことばで言い換えることを指す。

送り手および・または受け手が、自分たちがおなじコードを利用しているかどうかを確かめる必要があるときにはいつも、ことばはコードに焦点が当てられている。

すなわち、ことばはメタ言語的機能(つまり注解的機能)を果たしていることになる。

「よくわかりません。どういう意味でしょうか」と受け手がたずねたり、「はて、その心は」とたずねる。また、送り手は、このような聞き返しを見越して、「おわかりですか、どういう意味なのか」と問う。

このように、何かの状況から、表現の中の「ことば」を意識させることを、メタ言語機能という。

それゆえ、普段のことばのやりとりでは、メタ言語機能は働かないのが正常で、働けば、むしろ異常というべきである。

表現の流れにストップをかけて、ある言葉に立ち止まり、通常は意識しない「ことば」について考えるのであるから、それは、言葉のある部分に注釈を加えることに外ならない。

注釈ということばからは、だれしも、古典文や外国文の解釈を思う。

確かに、訓話注釈とは、メタ言語機能の発動に終始することである。

例えば辞書なんかがそうだ。

くうふく【空腹】：腹がへること。すきばら

などの事例がメタ言語的機能を持っているといえる。

＊職場で一人が　“アメガフッテイル”と独り言のようにつぶやく。
おやっと思い、「飴かな？雨かな？飴が降るのは変だから、雨だろうな・・・・」などと思う。

このように語形と語意との関係づけにまぎらわしさが生じたりすると、始めて、語形を意識し、そこに「ことば」があることを思うのである。

6. 詩的（poetic）機能

メッセージそれ自体への志向(Einstellung)、メッセージそのもののためにのみメッセージに焦点を合わせるのは、言語の詩的〔poetic]機　能である。
詩的機能は、等価性の原理を、選択の軸から結合の軸へ投影する。
詩的機能とは言語表現を使って、そのもので遊ぶことを意味する。
俳句やラップなどが当てはまる。